

嬉泉の新聞

- 嬉泉の新聞／第29号／1994年（平成6年）11月発行（年3回発行）
• 発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
• 発行人＝石井哲夫 • 編集人＝友田篤

「40年を思う」

江 草 安 彦

私は、精神薄弱児者を中心とした障害者の医療福祉の現場ではぼ40年間、理事長、施設長として働いてまいりました。この40年間は、私にとって人生のすべてであったと言えますが、この40年間は、また、わが国の障害者医療福祉の発展の縮図でもありました。この時期に出くわしたことはとても幸せでした。私は、知的障害児への医学的対応がほとんど無に等しい40年前に、一人の障害児と家族の前に立って、小児科医として無力を感じつつ、施設人となったのです。

40年間のうちに、市民の障害者観は随分変わりました。社会的少数者から、社会の一員として生活することが可能な状況となってきました。人間尊重の思想が広がり、深まってきたと言えるでしょう。

次に、障害者への医療福祉サービスのための社会福祉施設、学校、社会保障、社会福祉の諸制度が次第に整えられました。40年間の充実ぶりはめざましいものがあります。胎児から高齢者まで、障害の程度の軽い方から重い方、重複障害の方まで、欠落のないサービスの流れができたと言え言いすぎでしょうか。細分化とともに統合的サービスについても考えねばならないのも事実です。

3番目に気がつくことは、40年の間に障害者本人、そして障害者の家族、関係の医療福祉従事者があがり、少数者として発言するのではなく、市民の権利としての立場から発言し、行動し、

具体的に解決策を提言することができるようになったことです。「障害者にとって住みよい社会づくり」をめざすのではなく、「万人が住みよい社会づくり」をめざし、その先頭に立つようになってきているように思います。少なくとも私の身边では、そんな状況をみるができます。頼もしい限りです。

4番目に、施設現場で活躍する職員は量的にも専門性においても飛躍的に向上してきました。しかし、かつての職員がもっていた情熱は、残念ですが、薄らいだように思うのです。サラリーマン化とでも言うのでしょうか。「専門性」についても考えてみるべき時が来ていると思うのです。障害児の医療福祉サービスは問題を残しながらも、確かに長足の発展、充実を遂げてきたことは否定できません。

保健・福祉・医療はその国の文化、歴史、民度と深く関係していますし、経済力とも大きく関わっています。このことを考えてみることは、これからの課題でしょう。

40年前の障害児医療福祉を取り巻く諸条件と今日のそれを比べ、よくぞここまで来たものだと思う日々です。共に生活し、共に働き、共に祈る人々との“暮らし”に限りない感謝をもっています。1994年、まさに歴史的には世紀末が近づいていますが、人間の生活にとって、すばらしい出発点にしたいものです。

（旭川荘 理事長）

「共炊」と言いつつ

よい実践を進めていくためには、職場で頑張ってくれる人を多く増やすことである。よく社会福祉施設の利用者との共生共存などと気楽に言う人がいるが、実際施設で一緒に暮らしたこともないもの言うことは、信用できない。共生共存などは、たやすくできるものではないのである。つらい共生共存がどのようなものか作られるかが説明できなければならぬ。

私の職場では、言葉の少ない芸術肌の人が増えてきている。不言実行が高い価値となっている。これは、社会福祉施設の生活援助という仕事の特性からくることだと思っている。そのことは、価値のあることと思ひ、それを基本的に否定するわけではないが、現場の直接処遇職員がそれぞれの個人的な経験や感性から来る自分の美学や価値観にこだわることになるかどうかとも困るのである。

肌職人の職人気質が現場で増えてくると、社会的に自分たちがどういう仕事をしているのか、この社会の中で利用者に対して、どういうサービスをしてあげたらよいかなどがはっきりしなくなつて来て、自分の意見にこだわら初めて、人に対してゆずらなくなるからこわいのである。人に対してわかりにくい自己の価値観にこだわる人があることに立ち入れなくなるので困るのである。これを打ち破るためには、この人たちに對して無言の体験的指導が必要なのである。

施設経営の創造性

(その二十) 石井哲夫

ことが多く、まじめに頑張っているものの意欲を阻害させる奴である。こういう奴ほど何事にも困らず、自分本位で、楽をすることを求めて、上手に立ち回れるのである。

きちんと私たちの仕事の理念を現場から離れずに人に語れる指導者を育てるためには、私たちは、出来るだけ現実の生活の仕方を共有していかなければならないと思っている。

あの岡山孤児院を創設して、わ

指導が必要なのである。

特に指導者には、それが求められる。私は、よく指導者研修として生活を共にすることに努めている。よい指導者に恵まれないと現場は、アジテーターによってかき回されてしまうからである。私も今までいろいろと苦い経験を重ねてきている。

今まで、一番職場で悪かった奴は、口ばかり達者で感情的になりやすく、人に対して支配的であったり批判的であり、すぐに何かという物事を斜めに見てちゃかす

が国の慈善事業の一つのモデルされている石井十次先生が、「共炊」「共食」「共住」「共生を説いたが、中でも「共炊」とは、しゃれた含蓄のある言葉であろう。私も何かにつけて菓子や酒でも、多くの人とともに食べる癖がある。食事をしているときの無防備な人とのつきあいが好きなのである。何も酒でなくともいい。(酒が飲めなくなった現在の心境として) ただ「共炊」とは、食事を一緒に作ることである。社会福祉法人嬉泉では、年に二回は、バザーを大々的

に行い、今年で三十回となったから一連の歴史がある。このバザーで私は、毎回「おでん」の担当をしてきた。そして時折、他のことまでくちばしを入れることがある。このあいだのバザーも焼きそばの担当者を、袖ヶ浦ひかりの学園の主任指導員の川相君にしてみらい、露天のソース焼きそばの作り方を伝授した。何人かの施設職員の中でタレントを発見していくことは、楽しいことであるが、職員は、私の心づもりをなかなか理解できないようである。職員のプライバシーを損なわずに上手に関係を深めていくことは、「共炊」が必要で「共食」より先に来なければならぬ。人にもものを食べてもらおうと言うことは、養護の中の一つの重要な柱である。社会福祉援助の「養護」は、まさにプライバシーの接触であり、被援助者と対等な立場に立つという配慮が何よりも必要なのである。亡くなった母が、遊びに行く八十歳を超えても「何か作ろうか」と言つて、私の目の前で小鍋仕立ての食べ物を作れしように作ってくれたことをしきりに思い出す今日この頃なのである。

私たちの

つづきの家

須藤福祉センター各事業所からの報告

『つづきの家』の開設

小野 多規子

学園の取り付け道路を進出し、サイクリングコースに隣接したところに2階建ての「つづきの家」があります。この建物は、今年の7月に完成したまだ真新しいもので、1階は作業場、2階は個室5部屋の住居部分になっています。

この「つづきの家」は、以前から子どもたちの生活研究所に縁のあった福井在住の前川さんのご寄付により建てられました。

「つづきの家」は、施設の中から「つづきの家」へ、「つづきの家」から社会へという自閉症の利用者にとって困難な社会参加を目標にという意味で石井所長が名付けたものです。

自閉症の人達の社会参加は、何年来、ひかりの学園においても試行錯誤を重ねておりますが、いく

度の困難に直面しています。仕事をこなす能力はあっても、人間関係がうまくいかない、自閉症独特の拘りや表現のまずさから、社会では認めてもらえないなど数々の問題を私たちに教えてくれました。私たちはこの事を素直に受け止めて、自閉症という障害を持つ人達の自立を考えてきました。

社会の中で仕事をし、報酬を得ることも大切なことですが、利用者自身が現実の自分の生活に目を向け、生活の自立を目標にすることで、社会に出て働く事もその中のひとつとしてとらえていくことに意味があるように思われます。

袖ヶ浦ひかりの学園は、精神薄弱者の更生施設です。施設という集団生活ですので、どうしても、利用者自身の生活の自立の場が持

ちにいくことが問題にされてきました。

そこで、この「つづきの家」の2階の居住部分では、利用者が個室に住み、洗濯、掃除、食事などの基本的な生活を利用者自身が考え、実践していきます。また、経済的な自立も求めていきます。ですから、働いて収入を得て生活費に当てていくわけです。入居に関して、このような生活の自立を目指す気持ちがあるかが一つの条件になっています。

現在、女性の利用者1名がこの「つづきの家」を利用してしています。管理人ということで生活を共にしておりますが、施設の中では、起こり得ないことが次々と起こり、



利用者自身が自分で考え、判断しなければならぬ状況があり、混乱もしますが、現実の事態に直面し、具体的な一つ一つの問題解決に取り組んでいます。生活を始めた当初は、こんな事に躓くんだと正直言って先が思い知らされる事もありましたが、生活経験の無さが起因していることが分かり、より多くの状況を提供し、共に生活すること、具体的な場面を通して共に考えることが求められているんだと痛感しております。

1階部分の作業場は、一般社会の作業場と考えています。袖ヶ浦のひろ学園、ひかりの学園は、選択的作業指導という形での作業指導が行われていますが、「つづきの家」の作業場はこの作業指導の延長線ではなく、あくまでも、社会を意識したものを考えています。

「つづきの家」は、今スタートしようという段階で、どういう展開になるか、不安な面もあります。が、石井所長の「つづきの家に止まらず」に「社会へつづいていく」という考えに基づいて事業を押し進めていくことが求められるのだと実感しています。

(袖ヶ浦ひかりの学園園長補佐)

職員の思い

手応えのある仕事

小沼 八美

私は嬉泉で働かせていただいて一年半過ぎる中で、この職場は利用者の気持ちを大切に、その気持ちを読み取りながら、丁寧に子どもたちに関わっていると、思いました。そして、何よりもそのことを重視して実践している職場だと思いました。

私の今まで働いていた福祉施設での経験からして、そのような嬉泉の一人一人の利用者の気持ちを大切にしているところは、他に類を見ないものだと思います。日常の仕事の中で見られることですが、私たちは利用者に対して日課を押しつけたりしていないでしょうか。私は時々利用者の気持ちを汲み取れずに自分の考えを押しつけたり、「しようがない」と自分に言い聞かせて諦めさせようとする自分に罪悪感を覚えることがありました。仕事の中で私自身が「選択」をしなければならぬことが多くあります。その場合迷うことがあったり途中でホントにそれで良かったのだろうか、確信が持てずに



立ち止まってしまいがちな私の性格は、今まで常にそのような迷いの連続でした。

そんな時、自分に言い聞かせていたのは、止めたところで人間関係は生きる上で逃げられないことであるから、と懸命に自分を励ましていたのです。何よりも励みになったのは、利用者の喜んだ表情が見られるということ、そして、利用者と接することで、自分の欠点がはっきりと指摘されるという手応えのある、貴重な経験が得られる仕事である、ということが少しづつ分かってきたからでした。今ではそのようなことを実感させてくれる職場を提供してくださっ

て感謝しております。

(赤塚福祉園)

成長すること

岩下 哲也

就職してから3年目になるが「光陰矢の如し」本当に早く感じる。誰でも仕事の中で得意なこと、苦手なことがあると思うが、自分の場合苦手なことの方が多く感じられる。だから新人の時は戸惑うことが沢山あり、ただ一日一日の日程をこなして行くだけで自分の中でゆとりがなく終わる感じだった。そして傷つくことも多く、今までは自分にとって苦手なことに

関しては直視しなくて、うまく避けてきた部分があるが、「これやって」と目の前に示された苦手なことに対して「ノー」と言う自分が凄く嫌で、言った後での心の傷は大きかった。そして、お子さんに関わる時に、自分の存在をはっきり出していく部分があるが、それも苦手な分野で、なんとなく恥ずかしい気持ちがつきまといはつきり出していけないことがあった。自分でもよく分かっている所で、そのことを打ち合わせで指摘されると、そこで「自分を変えていくしかない」と自分に言い聞かせる

自分がいる。その繰り返しだが、自分を見つめ直す時には自分に対して問い掛けたり励ましたりして、時間を掛けて自分の気持ちに折り合いをつけることをしていく。同じあやまちを繰り返すのはよくないことと思うが、そこで傷ついて自然に治っていく過程があつて少しずつの成長があると思うし、成長とは人それぞれのレベルによっての成長があると思う。自分をしっかり分かって、目標を立て、傷付くことを肥やしにして成長し続けていけたらと思う。

(めばえ学園)



地域に支えられて

袖ヶ浦の就労事業所

(その2)

先回に続き2回目の紹介となります。

そのひとつが、田中君がお世話になっている「ダスキン袖ヶ浦店」です。彼も「ひかりのタイムス」に何回か原稿を書いている一人ですが、これまで不動産屋さんに長い間お世話になっていました。しかしここでの仕事は実質的に少なくても手当をもらえないようなことは出来ていませんでした。学園から離れて地域社会で仕事をすることには抵抗が少なくなってきたので、働いて相応の賃金がもらえることを目標にできる仕事場を探してあげなくてはならなくなりました。彼は簡単な配達や買い物得意なので、新聞配達、ヤクルトの訪問販売、酒屋さん、などを当たってみました。引き受けてくれそうな理解者はなかなか得られませんでした。ある朝、たまたま見た新聞に「ダスキン」が障害者の海外留学を援助している広告

が掲載されていました。「これだ」と思いさっそく動いてみると意外に学園の近くに「ダスキン袖ヶ浦店」があったのです。支社長さんに事情を話したみたところ即断即決でした。「何か地域社会に役立てることはないか考えていた。障害を持つている方の面倒をみさせていただくことで、私たちの人と接する気持ちや態度が違ってくる」というお考えでした。大した仕事もできないのに、はじめから最低賃金を保障してくれました。

飯田さんは現在は「ビジネス旅館長浦」で仕事をさせてもらっています。彼女は以前から園内の洗濯室や食堂で実習をしてきていて、はじめは近くの老人ホームで職場実習をさせてもらいました。技能的には高いものがあって、仕事は強迫的とさえ言われるほど確実なものがあり、この老人ホームでの実習をステップに職場開拓をしたわけです。仕事の内容もさることながら、ここでも好意的な理解者に巡り会うにはなかなか困難なものがありました。この旅館で出会っ



たのは現在2代目のおかみさんです。なかなか知性的な方で地域活動に熱心で、障害者問題にも理解があります。はじめは直接飯田さんの仕事を教えてくれました。掃除の仕事が中心ですが、特にお風呂の掃除に関しては先代のおじいさんにすぐく気に入られて「飯田さんが掃除してくれるとすぐくきれいで気持ちがいいから一番風呂に入っているよ」とおっしゃってくれます。

(友田 篤)

ボランティアの

永原さん

この九月から、毎週金曜日に学園にきてくださり、沢山の収穫物の保存と調理方法を教えていただいております。栗のしぶ皮煮・いちぢくのシロップ煮・ナスの砂づけなどです。永原さんは、以前ケイ屋さんを開いていらしたプロで、素材の持つ味をじっくり引き出す方です。そのため、仕事はとっても丁寧で、いろいろな工夫もありです。

学園との交流のきっかけは、数年前のパザールの折りに、手作りのケーキを沢山焼いてお嬢さんと売ってくださりその売り上げをご寄付いただいたことでした。その後は、毎年クリスマスになるとクッキーを沢山お届けくださっています。今回、「ケーキやジャム作りにご助言いただきたい」とお願い致しましたところ、快く引き受けてくださいました。

これから学園の四季折々の産物がどのように永原さんの手で変身していくのか楽しみにしています。

(池田万紀子)

嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉

只今バザー準備

真っ最中!

子どもの生活研究所の待合室は、さながら内職幹旋所のよう。裁断された手芸材料が次々消えて完成品が増えていく。袖ヶ浦の研修棟では常連のお母様方が、中古衣料の山と取り組んでいらっしやる。敷地内で取れた「栗」はほとんど剥かれて冷凍庫へ。そろそろ、めばえ学園・すこやか学園のお母様方がお家でクッキーを作っていてくださるかもしれません。10月後半の子研は例年ながらバザー一色になってきます。子ども達は一見この状況と関わりなく過ごしているように見えるが、そんなことは断言出来ません。なにしろ、知らん顔して、いろいろなことを見聞きし、感じたり分かったりしている子どもたちだから、毎晩10時、11時まで仕事して、疲れのたまっ



ている先生たちに密かに協力してくれていないとはいえませんが、この新聞がお手許に届く頃は、「素晴らしい成果とともに終わったバザー」を過去のものとして、先生と子ども達、そしてお母様たちの静かな日々が戻ってほしいものです。

(奥村 幸子)

NHKの取材

毎年9月になるとNHKが「子ども療育相談」に「自閉症」を取り上げ、その取材にみえます。以前はその特徴をはっきり見せてくれる自閉症児が沢山いたのに、この頃はよほどじっくり構えて撮影しないと「自閉症らしさ」が見えず苦労します。代わりにお子さんの「テレビ出演」を快諾してくださるご家庭が増えて素晴らしい事だと感じています。NHK好きの自閉症児と、自閉症児好きのNHKのカメラマンやディレクターが多いのも不思議なことです。

〈袖ヶ浦〉

バスの寄付二台

このたび袖ヶ浦市と幸和観光株式会社より大型バスとマイクロバスが寄贈されました。

袖ヶ浦のびろ学園と袖ヶ浦ひかりの学園は自閉症児者の療育専門施設として、学園での療育を吸収し、育む基盤としての親子関係を大切にしています。そのため、利用者や家庭からの希望により週末の家庭への帰宅を実施しています。



バスは親と子の絆、学園と家庭をつなぐ架橋であります。

しかし、近年バスの老朽化がすすみ多額の資金を要する新規車両の購入の必要性にも迫られていたところでした。

袖ヶ浦市と幸和観光株式会社の深いご理解に加え、地域の方々のお力添えにより、車両切り替えに際して、両学園に大型バス、マイクロスバスを寄贈していただくことができました。

袖ヶ浦市の皆様始め、学園に示されましたご援助に深く感謝し、御礼申し上げます。

「ブルーのバス」の愛称で呼ばれてこのバスは家族の待つ家へ利用者の思いを乗せて毎週送迎に活躍しています。(春原一道)

〈赤塚・高島平〉

赤塚福祉園の授産施設

赤塚福祉園の授産施設の近況をお知らせします。

赤塚福祉園の授産施設で指導している作業には、大きく分けて2種類の作業があります。それは受注のしごとと自主製品のしごとです。受注のしごとは企業や団体などから注文を受けたもので、銀食



TELEPHONE CARD 50

器磨き、ガーゼ折り、祝儀袋の袋詰め、アンティーク家具の補修と機関紙の発送などのしごとを行なっています。自主製品のしごとは創作活動と呼んでおり、はた織り、木工と陶芸があります。はた織りではコースターとランチョンマットなどの敷物を、木工では菓子皿とキーホルダーを、陶芸ではランプシェードと土鈴を、それぞれ販売を目的とした自主製品として創作しています。

今回、板橋区では区内の心身障害者のための授産施設等の自主製品を紹介、展示する場所を設けることとなり、先日その開設式典に利用者共々、出席しました。その場所は「ふくし展示コーナー」と

命名され、板橋区情報処理センター1階ロビー(板橋区板橋2-165-16、区役所本庁舎から山手通りを熊野町交差点方向へ200m)にあります。この「ふくし展示コーナー」に赤塚福祉園から前述の自主製品を展示し、また開設を記念し発行されたテレホンカードには赤塚福祉園の作品を紹介する写真が選ばれました。今後、3ヶ月毎に展示替えをおこないます。みなさんにも、ぜひ、見ていただきたいと思っています。(小野直人)

高島平五丁目福祉園の

納涼会

「ピンゴ!」

車椅子に乗った利用者が職員と一緒に舞台の方へ出てきます。賞品を受けとると、会場からは喝采の拍手。ちよびり恥ずかしそうにはにかんだ顔を見て、私たちは「今年も納涼会をやったよかった」と思いました。

これは去る八月二十日に行われた納涼会のひとコマです。この会の目的は、利用者・ご家族相互の親睦と地域との交流ですが、今年は特に利用者本人の人間関係を中心とした交流に焦点を当て、お友

達や親戚の方、養護学校の先生などを利用者自身がご招待する形をとりました。

そういった気心の知れた人達の集った今回の納涼会のハイライトが『ピンゴ大会』でした。当初、一時間という時間設定に、間がもたなくなるのではといった心配もありましたが、いざ始まってみると全員が身を乗り出して来て、司会者が読み上げる数字に一喜一憂、時間の経つのを忘れる程の盛り上がりを見せました。全員が最後まで参加でき、楽しんでくれたことは、私たち職員にとって最大の喜びでした。

そして、今年も親御さん方には多大なご協力を頂きました。春の懇親会の折りに、ご父兄の発案、全員参加で結成された父母会組織「五丁目支援クラブ」。その代表者の方々が納涼会の実行委員として準備の段階から積極的に関わってくださったのをはじめ、当日にはほぼ全員の方が協力してくださいました。

こうした行事を通して、利用者を取り囲む多くの人達が触れ合い、利用者の生活が豊かになっていくのだと感じた夏の一日でした。

(石井 啓)

ひかりのタイムス

独立第23号

※今回も前回にひきつづき、袖ヶ浦ひかりの学園設立十周年を記念した特集号を企画しました。

ひかりの学園での

十年間

(前回のつづき)
飯田 真奈子

その為不愉快な事や困った事・イライラした気持ちをなかなか先生に言えませんでした。だから言いたいのになかなか言えなかったの、私自身どうしていいかわかりませんでした。今では先生に自分の気持ちを正直に言える様になりました。この事で先生方がかえって不愉快になるみたいな気がして十年間で私が良くも悪くも変わったような気がします。この十年間で私が何よりも嬉しいのは十年前の大きな夢だった事が実現した事です。それはビジネス旅館で働くようになった事です。91年秋から始めたこの仕事もう三年目になります。皆様に認められ毎月給

料を貰い生活費を自分のお金で賄う事ほど嬉しい事はありません。良い仕事場が見つかった事を本当に幸運だったなあとつくづく思います。そうしてそういう仕事場を見つけてくれた先生方にも感謝しなければいけないと思っています。旅館での仕事が出来た様になったのは、学園での仕事を一生懸命やってきた成果だと思っています。ちょっと順番が逆様になりましたが、旅館の仕事をする前は近くの老人ホームで洗濯物をたたむ仕事をしていました。それが社会に出る前の最初のステップだったと思います。十年前、そして今年は私にとって大きな節目の年です。ひかりのに入った年は私は九月で30才になるうとしています。又30才を区切りこれからも色々な事を学び新しい事をお勉強していきたいと思っています。この十年間の事を文

章で表すのは始めてです。

読者の方もお読みになって意味のわかりにくい所があるかもしれませんがごめんなさい。

(利用者)

十年間の生活について

秋山 良江

私はもうこの学園に来て10年も立ちます。学園に来たばかりの頃2週間だけのびろで過ごしていましたが、ひかりの方が居心地がいいと思ったのでひかりの方へ移って来ました。十年間のひかりの生活ですが、もうすっかりこの生活には慣れました。自分の好きな事をやるし、作業も自分の好きな作業が出来ると、もう家より楽しくなっていました。家より出ると、家の料理よりも美味しいし、またお楽しみな所もあります。空いている時間に適当な事も出来てとても楽しいと思います。

私はこのごろパン工房をしています。今やっているこのパン工房のお仕事とても私は気に入っています。でもやっぱり時間が決まっているという所は家と違うので、そこはちょっと困ると思います。



すが、でもやっぱりひかりの学園の生活はすっかり慣れてきています。確かに十周年ですので、でも凄いなあとつくづく思いました。私が来た頃はちょうどひかりの学園が建った年だったからです。でも私が手紙を人に出す時学園の住所で出したりしています。これからもずっとひかりの学園にいたいと思います。(利用者)